2001年度環境セミナー

中国での植林ボランティア活動で考えたこと
—多国解決主義としてのボランティア活動—

山　本　　健

(1)　中国での沙漠植林ボランティア活動報告書の内容

筆者は1998～2000年の３年間、連続して本学（敬愛大学・国際学部）の学生たちと一緒に中国の内蒙古自治区（恩格貝：オンカクバイ）で植林活動に参加した。そしてその活動内容を本誌の第９号（2001年）で発表する機会を得た。そこでは本学国際学部の中国・沙漠植林ボランティア活動が学生自身の意思に基づくこと、筆者（教員）はそのサポートに徹し、中国現地の恩格貝植林基地の所長さん（遠山正瑛先生）をお呼びして、現実の植林活動に対する学生たちの理解を深めさせたこと、また沙漠植林ボランティア活動を学生だけでなく、地域住民をも含む学生・一般人の混合形式を採用して、開かれたボランティア活動をめざしたこと、そして最後に学生たちの３年間のボランティア活動の顛末などを紹介した。

確かに、３年間の学生ボランティア活動を――学生の、学内にいる時とは明らかに異なる積極的な行動を目の当たりにして、本学でのボランティア活動の教育的効果（自主性の発揮）は認められるように、筆者には思われる。しかし、講演会や報告会などでは、必ずと言っていいくらい「なぜ、外国で植林ボランティア活動をするのか？」「なぜ、国内での同様なボランティア活動ではないのか？」と聴衆から質されることがあった。それゆえ、筆者は、この問に対して、本セミナーという機会をお借りして、以下で、自らの存念を述べてみたい。

(2)　多国解決主義としてのボランティア活動の意義

まず、上記の拙文「ボランティア活動報告書」の中に見られるように、参加した学生たちは異口同音に、テレビでしか見たことがない沙漠を自らの目で、また自らの足で体感して、感動した、と言う感想をもらしている。これは取りも直さず、「異質な世界」や「リアルな世界」を知らず、ただヴァーチャルで知っているに過ぎないことの身上告白であり、「異質性への関心の希薄」さの告白でもある。そしてこの事は、おそらく「モノ余り社会」で、かつ「便利で快適で均質な生活」（日本）の中で暮らしている若者一般に共通する傾向であろう。今日の日本では、たとえ地方（田舎）に行ったとしても基本的な生活レベルは都心（都会）と同じであり、異質性への関心を回復する機会は少ないように思われる。

これに対して、日本の外の世界には、著しい不均衡な経済発展の結果、「世界システム」に「周辺」

として組み込まれ、開発から取り残された地域が多数存在する。このような「周辺」地域の存在を無視して、今日のリアルな世界認識は不可能であろう。そこで「異質な世界」の現実をほとんど知らない日本の若者たちに、このような「異質な世界」を知らせることで、従来の偏りのある思考ないし価値判断が若干ながら是正されるのではないだろうか。幸か不幸か、筆者が参加している中国での沙漠植林ボランティア活動対象地域は、中国の中でも開発から取り残された沙漠地域である。まさに日本人には打って付けの「異質な世界」である。それゆえに、沙漠植林活動に参加し「異質な世界」の現実を知った学生は、おそらく、自分たちの「便利で快適で均質な生活」やその享受者たる自らを内省することが可能となろう。

他方、このような「周辺」地域の住民は、確かに「遠くの理想達成より、近くの現実改善を」と言うスローガンを掲げて経済的利益を希求している。しかし、「経済的価値の追求」を本質とする企業の立地条件に合わない地域性のため、企業進出は遅々として進まず、それゆえ個人（民間）レベルの協力を歓迎する傾向にある。もちろん外国人（植林ボランティア）の現地訪問も歓迎される。しかも定期的な訪問は現地人との親密な交流を可能とし、相互理解と信頼関係の構築をも可能である。もちろん、このためには、訪問者側にも現地語（中国語）の習得などの義務を伴う。しかし、この点をクリアすれば、定期的な訪問は現地人に植林の意義を理解させ、また参加を促し、最終的に彼ら自身の自助努力を引き出す、という効果を生み出すであろうし、事実、生み出している。この意味で、「周辺」地域の住民（中国・内蒙古）にだけ任せるのではなく、私たち外国人も間接的に関与することも双方にとって有益である。この点で、多国解決主義としてのボランティア活動は意義があるように思われる。

それでは外国（中国）での植林と日本との具体的で、直接的な関係の１例として、黄砂問題を取り上げてみたい。

(3)　中国での植林支援活動と日本の関係
――黄砂をめぐって――

今年の黄砂はこの数年では最大級の規模であることを、３月中旬の新聞各紙が報じていた。黄砂は、周知の如く、中国の黄土地帯（陝西省、山西省など）の砂じんが偏西風に乗って飛来したものである。すなわち３月20日には北京、21日には朝鮮半島（ソウル）そして22日には日本（北海道、東北地方）の空をおおった。この黄砂の移動は、気象衛星「ひまわり」の黄砂の画像を加工した高知大学のホームページ「気象情報頁」（http://weather.is.kouchi-u.ac.jp/）に掲載してあった。

ところで、黄土高原の土は粒子が細かく、粘りけがある。この地域は冬の間は雪で地面が覆われているので黄砂は飛ばないが、雪が解けて、まだ大地に緑が少なく、強い風が吹き始める３月から５月に黄砂は顕著になる。今年の大規模の黄砂現象は、中国内陸部の砂漠化が進行していることを示している。－もちろん、黄河沿いでの農業用水の大量使用による黄河水量の減少、さらには地下水の汲み上げ過多による土地の乾燥化なども黄砂が増えた原因である。－この砂漠化を防止する有効な手段が植林活動であることは言うまでもない。

日本での黄砂現象は、図１から明らかなように、最近の２年間（2000年748回、2001年856回）急増

している。今年（2002年）は４月１日までに、観測回数はすでに493回に達している(読売新聞：2002年４月13日夕刊「子どものニュースウィークリー」)。日本では、北京やソウルのように、視界が低下して交通に支障をきたす状態には至っていないが、軽微な影響（洗濯物に砂が付いた）は報告されている（毎日新聞：2002年３月22日「春の使者　黄砂飛来」)。この点からも一概に黄砂問題を「中国の環境問題」の一言で片づけることはできないであろう。外国人も自らの協力の限界をわきまえながら、中国内陸部の砂漠化防止プロジェクト（朝日新聞：2002年３月21日「黄砂に降参－北京」）に協力し、植林支援活動に参加する意義はある、と筆者は考えたい。なお、北京市の黄砂対策については、「黄砂の嵐と闘う巨大都市・北京の挑戦」（テレビ朝日:2002年３月31日「宇宙船地球号」）で放映されていた。

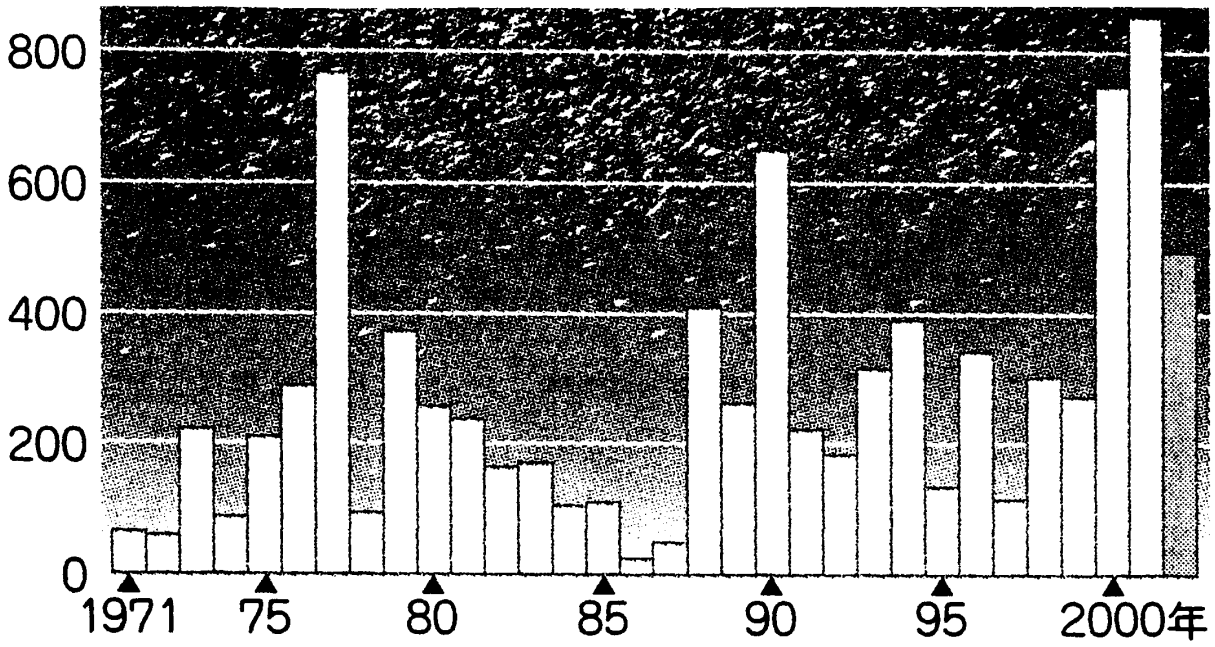

図１　黄砂を観測した回数の合計
※ 2002年は４月１日までのデータ。